三重県護国神社奉賛会報

第七十七号

春季慰霊大祭にて玉串を捧げる乙部会長

春季慰霊大祭

四月二十一日・二十二日の両日にわたり春季慰霊大祭が御遺族奉賛会員の御参列のもと厳粛に斎行された。

乙部奉賛会長の玉串拝礼に合わせ、奉賛会員等が御英霊に感謝の誠を捧げた。

万灯みたま祭

（七月二十三日～二十五日）

かつての国難に際し、家族と郷土と国家を護らんとし、御盾となり命を捧げ尽くされた護国の御英霊に万の灯をもってお慰めし、平和を感謝し幸福を祈念しましょう。

当奉賛会でも拝殿前に大型提灯二灯を毎年献灯し協賛しておりますが、会員各位よりの尚一層の御献灯を宜しくお願い申し上げます。

◇一般献灯　一灯　二千円

◇特別献灯　一灯　五千円

鳥居脇に献灯します

外拝殿に献灯します

会費納入のお願い

『平成二十二年度』は来る八月三十一日をもって終了しますので、本年度会費未納の方は早めに納入頂きますようお願い申し上げます。

尚、納入の際は奉賛会専用の振込用紙をご利用下さい。

※送金手数料は奉賛会で負担いたします。

年度会費　正会員　二千円
特別会員　一万円

―― 英霊の言乃葉 ――

強く明るく直く生きよ

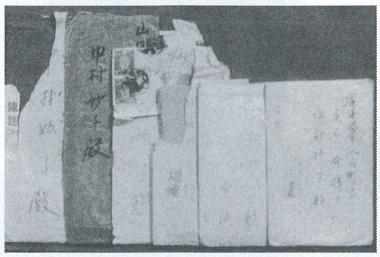
海軍大尉　中村　輝美　命

海軍第十三期飛行科予備学生
昭和二十年五月三十一日没
山口県出身　二十三歳

妙子よ多幸なれ
妙子の行動に関しては只々信と愛あるのみ
強く明るく直く此の世を生き抜かれ度し
尾田の御両親
色々有難う御座いました。妙子には気の毒でしたが…私としては短い乍らも幸福な日々でした。後は残る妙子を願ひます。
母上・文夫　様
仲良く!!不孝を不悌を只謝すのみ
妙子の良き相談相手となられる様切に祈ります。三人仲良く!!皆仲良くとり急ぐまゝ乱筆
妙子の行動は妙子の心のまゝに…
皆良き相談相手になつて下さい。では御多幸を…
皆々様　輝美

【平成十八年七月　靖國神社社頭掲示】

英霊の言乃葉（9）より転載



わずか十日間の新婚生活しか送れなかった妻妙子さん宛の書簡

【解説】

昭和二十年五月三十一日、菊水九号作戦事前沖縄周辺拍地偵察の任を帯び、偵察機「彩雲」に搭乗、鹿屋基地を発進、悪天候を冒し那覇沖の拍地を偵察中、一四四五、一四五〇、一五〇三の三回にわたり「吾戦闘機ノ追躡（ついじょう）ヲ受ク」を発信後、連絡なく未帰還、戦死。

中村中尉は大阪毎日新聞社が新東亜建設に献身すべき小壮有為の人材を育成するため、上海の東亜同文書院へ派遣する委託学生募集に応募、西日本全府県の中等学校卒業予定者の中から各県二名の被推薦者となり、大阪における学術・人物・健康の試験を突破、五名の適格者の一人に選ばれた学力優秀、心身両全の青年であった。

委託学生が世に出るのは五年後であったが、大東亜戦争が激化した一八年、焦眉の急に応じ得るため、学業半ばで繰り上げ卒業し学徒出陣、第十三期飛行科予備学生として海軍に入隊するが、本教程でも優秀さを発揮、修業時には御賜の文鎮を下賜（かし）されている。

中村中尉は昭和十九年九月に結婚するが、妻妙子さんと所帯を持つことはできず、鹿屋における二十年五月二十日から三十日までの十日間が新婚生活のすべてだった。

三十日夜半（出撃前夜）帰宅した中尉は「明日、沖縄の索敵から帰投したら松山空へ転勤する。準備しておくように」と言い、三十分ほどして慌ただしく帰隊した。無事を祈って見送る妙子さんには、それが永遠の別離となった。

挙式からこの日までの八カ月間、激しい訓練と決死の索敵行の合間に各基地から妙子さん宛に書いた便りがたくさん残されているが、「読後必火中」と上書きされた最後の便りは次の通りである。

妙子さん元気で。強く。幸多かれと祈る。不思議な、因果な、そして淡い縁だつたね。然（しか）し、中村輝美てふ男の心には強く焼きつけられてゐる。（中略）万一の場合、天皇陛下の万歳を唱え奉り、その後の余裕があれば必ず妙さんに「さよなら」を告げるよ。心が一杯で何も書けない。未練に非ず、天翔（あまが）けり行く男の感激と別離の情。（中略）書き尽くせぬ心を、ただ、「妙さんに幸多かれ」と祈つて筆を擱く。

あとは偶然と運命…いつめぐりくるか　に任せて再会を期す。

心赴くまゝ乱筆にて

彼は決死の索敵行に文字通り「彩雲」となって沖縄に天翔けり征ったが、その新東亜建設の志は結果的に、戦後のアジア諸国の解放と独立に一擢の土となって捧げられたといえよう。

【いざさらば我はみくにの山桜　より転載】

「彩　雲」